

【講演記録/東方斎・荒尾精先生追悼式】

東方斎・荒尾精先生追悼式—挨拶—鐘崎三郎の末裔として—

角 眞由美

(2022年10月30日、荒尾精の追悼式の若王子神社の追悼式にて)

今日は、荒尾精先生京都追悼式が滞りなく執り行われましたこと、心からお慶び申し上げます。

また、愛知大学同窓会の実行委員会様の清掃やご準備に心から感謝いたします。僭越ではございますが、少しばかり自己紹介をさせて頂きたいと思えます。

私は、ただ今、九烈士の一人である鐘崎三郎の末裔として、ご紹介に預かりました角眞由美と申します。鐘崎三郎には兄と姉がおりました。姉はハツセと言ひ、私の母の祖母にあたります。

明治21年、鐘崎三郎は長崎で御幡雅文先生の書生となり清語を習っていました。そこで御幡先生の次兄である盛家次郎氏に気に入られ盛家の養子となり、長女(かね)と結婚をしました。盛家は銃砲火薬商を営む資産家でもありました。じきに二人には一人娘(貞)も生まれのですが、鐘崎は日清貿易研究所に入る直前に離縁をしまいませす。その後、盛かねは再婚しましたので、私が子孫として鐘崎家の墓を守っているわけでございます。

しかしながら先の大戦後、残念にも、母は鐘崎の話をも秘匿としました。昭和45年に大

川市で鐘崎三郎胸像再建式が催行されましたが、鐘崎三郎が何処で何をした人物なのか詳しくは明かしていませんでした。その時、私は高校一年生で、その胸像の除幕をさせて頂いております。ところが母は10年程前から、急に鐘崎の話をするようになりました。その内容は私たち家族を驚かすものでした。そこで関係者に相談をしまして、まず顕彰会を立ち上げ、令和三年「威風凛々烈士鐘崎三郎」という本を出版したわけです。

現在、百歳を迎えた母ですが、今でも忘れられないのか荒尾精先生や根津一先生の話をよくします。鐘崎は、二人の先生を最後まで心から尊敬していたそうです。

今日は、折角ですから最近判明した事柄を、少しお話したいと思えます。明治27年、日清戦争が始まると、9月から10月の間、遼東半島へ出発する前、鐘崎は広島大本営にいました。と同時に、柴田一能という人物に清語を教えています。

この事は、慶應義塾学報第16号(1898)に記述されていました。清語の堪能な人物は他にも沢山いたでしょうが、何故、鐘崎が選ばれたのか、その理由は不明です。残念ながら広島大本営で鐘崎三郎と柴田一能が話した内容についての記録はありません。

調べてみますと、この柴田一能という人物は、明治6年の京都生まれで、独学で英語を学び、法華経を一人で英訳した人物でもありました。この事は福沢諭吉の耳にも入っていたと思われます。彼も日清戦争の設営隊として従軍しましたので、丁度、広島大本営に留まっていたわけです。更に、八王子市にある日蓮宗・本立寺の真能師の弟子であった事もわかりました。この事で、「日蓮宗」繋がりでは鐘崎が選ばれたのだろうと私は直感しました。鐘崎も幼い時、日蓮宗・勝立寺の従兄である加藤日龍師の弟子になり「正学」と呼ばれていたからです。でもよく考えると、どうもそれだけではないように思われます。

英語の堪能だった柴田一能は日清戦争から戻ると慶應義塾に入り、明治34年には福沢諭吉にすすめられ、アメリカの名門イエール大学へ留学します。福沢諭吉は、柴田一能に「西本願寺の僧たちも、明治の初めに欧州諸国を具さに観て影響を受けているので、日蓮宗、いや慶應、日本のためにも見聞を広めてはいかがか」と留学を勧めたそうです。確か、荒尾精先生と御幡雅文先生は福沢諭吉とは「興亜会」という繋がりもあって交流も深かったとききます。(以降、敬称省く)もしかしたら福沢諭吉は、鐘崎三郎の事を知っていたのかもしれないと、そう考えるのも楽しいものです。

また御幡雅文は、鐘崎が長崎で清語を習った人物で、その当時、長崎商業学校の教師でした。それと同時に、猪飼麻二郎という人物が、長崎商業学校の校長を務めています。この猪飼を、日清貿易研究所の教頭に押したのが紛れもなく、福沢諭吉でした。猪飼は慶應義塾卒で福沢諭吉と同じ大分の中津出

身でもありました。つまり長崎商業学校から二人の教師が日清貿易研究所に向かったこととなります。甲申事変後に時事新報から「脱亜論」を出版したと言われる福沢諭吉ですが、依然としてアジアの解放には注目していたと思われます。

鐘崎三郎が感動したのは紛れもなく日清貿易研究所の募集における趣旨と演説でした。荒尾精は、明治22年12月に日清貿易研究所の入所募集の演説を福岡市の勝立寺で行っています。しかし鐘崎は、福岡ではなく東京での演説を聞いています。福岡での演説は明治41年に江島茂逸が『博多青年須読—荒尾精氏日清貿易談』(完)として記録に残しています。私が特に驚いたのは、『博多青年須読』の緒言の中で、江戸時代に密貿易で財を成した博多商人、特に伊藤小左衛門を褒め称えた文章が載せられていることでした。当時の福岡市長である山中立木は江島茂逸が創った伊藤小左衛門の詩歌『袖の湊』を配布し児童たちに詠詠させています。そして山中は日清貿易研究所の生徒たちに、上海へ出航するときは、先ず菩提寺妙楽寺にある伊藤小左衛門の墓を参詣して博多を発つようにとまで指示しているのです。その準備に対して明らかに荒尾精は賛意を示し敬意を表しています。入所が決まった日清貿易研究所生徒一行は、上京し有栖川熾仁親王に拝謁を済まし、斎藤修一郎農商務局長と岸田吟香の演説を聞きます。川上操六も同席していました。

しかし、鐘崎は先に書いたように勝立寺ではなく東京の演説を聞いています。ですから東京での演説に博多商人の話が出て来たかどうかはわかりません。当然、石川県で

の演説にも博多商人の話は出てこなかったでしょう。

博多商人とは、明、朝鮮、琉球、シヤム、ベトナムなどの地域から多くの産物が集まる中世最大の貿易港博多を拠点とした商人のことです。現在の福岡市の大博通りと昭和通りの交差する(蔵本交差点)あたりは、嶋井宗室、神谷宗湛、大賀宗九、伊藤小左衛門、末次興善といった博多商人が軒を並べていました。これらの商人たちは長崎に支店を持つものが殆どでした。

博多での演説で取り上げているのは二代目伊藤小左衛門という人物です。この人物は、黒田藩の御用商人として近世随一の豪商にのぼりつめ、銀7千貫以上の資産を持つ大豪商でした。その財力は、博多三傑をしのいだと伝えられています。しかし、禁制を破って密貿易を行い、朝鮮への武器輸出により長崎で磔にされてしまいます。この話は、事件の50年後、近松門左衛門が発表した浄瑠璃の戯曲『毛剃 博多小女郎浪枕』1718年(享保3)の題材にもなっていますので、当時は、どれだけ有名な事件かが想像できると思います。

さて、伊藤小左衛門は明治になると再び注目を浴びてきます。というのも、彼は明の復興を願い清と戦った鄭成功と何度も貿易を行ったとされるからです。当時の清との関係を考えると、福岡市長が、ここで伊藤小左衛門の名前を挙げるのも頷けるわけです。彼が密貿易をして朝鮮に武器輸出をした理由は鄭成功を助ける為だという説もあります。しかも鄭成功という人物は、3年前に同じく近松門左衛門の『国性爺合戦』1715年(正徳5)でも知れ渡っています。鐘崎が長

崎にいた明治22年には『唐人鬻今国性命』(竹柴金、1889年明治22)が発表されるくらいでした。

鄭成功の子孫と伝えられている鄭永寧は御幡雅文のかつての漢学の先生でもありました。しかも鄭成功は日本人との混血で平戸生まれです。ここで鐘崎の父親について少し触れます。鐘崎の父である円心は太宰府天満宮の社僧でしたが、嘉永年間に平戸松浦藩主の松浦熙から招かれ菩提寺樹光寺の住職となっています。その後、明治の廃仏毀釈で還俗した円心は、家族を伴って事業を興そうと長崎を目指しました。しかし所詮は士族の商法です。そのまま長崎で病死となり家族は無念にも郷里へ戻ってきます。そんな悲惨な姿を目の当たりにした鐘崎にとって「今や欧米列強に対して日本が生き残る為には貿易によって商売で勝つことにある」という荒尾精の言葉は、ズンと心の琴線に触れた筈に違いありません。明治になってもまだ士農工商という身分制度が残る時代、鐘崎は僧侶の身分でありながら商売に走り、失敗してこの世を去った父の面影を胸に、堂々と商売の正当化を唱える荒尾精の言葉にどれだけ癒され発奮したことでしょうか。

福岡の演説の話に戻しますと、福岡市長たちが伊藤小左衛門の話で盛り上げたあと、いよいよ荒尾精は演説を始めます。福岡での荒尾精の演説の内容については藤田佳久教授が既に論文として残されているのでここでは触れません。

東京で一度は荒尾精から入所を断られた鐘崎ですが、長崎で日清貿易研究所への入所を許可されます。その時の様子を郡嶋忠

次郎への書簡(憲政資料)には、こう書いています。

「袖浦之卓見家伊藤先覚 小左衛門氏ノ墓ニ謁セバ、幸ニ吾ガ為メニ、一杯ノ水、一枝ノ花ヲ献ゼヨ」

博多まで行けない鐘崎は、まだ福岡にいる郡嶋忠次郎に伊藤小左衛門の墓に自分の代わりに花を献じて参詣してくれるように頼んでいます。福岡の日清貿易研究所の生徒たちが上海に発つ前に先ず伊藤小左衛門の墓に参詣する事を郡嶋は手紙で伝えていたのではないのでしょうか。初代伊藤小左衛門吉次は木屋瀬出身でした。鐘崎が勝立寺を逃げ出して最初に寄った場所が母の郷里にも近い木屋瀬の妙雲寺でした。この土地柄も鑑みれば、貿易で財を成した博多商人に鐘崎の想いが一層重なったのではと考えられます。

さて明治 28 年、日清戦争は勝利します。その 3 年後の明治 31 年 5 月、博多妙楽寺境内に「伊藤小左衛門父子哀悼碑」が建立されます。これは福博の名士の賛助によるものでしたが、その名士の中に平岡浩太郎、安川敬一郎、杉山松太郎、麻生太吉、伊藤伝六など日清戦争で好景気をもたらした炭坑業の人物が多く見られます。玄洋社の平岡浩太郎や安川敬一郎らは、フィリピン独立運動や孫文の辛亥革命への支援を惜みず資金を提供しています。なお碑文は江島茂逸で、字は木屋瀬出身の崇福寺和尚玄外が書いたものでした。

日本は再び日露戦争(明治 38 年)で勝利しました。まさに日清日露の勝利で日本中が湧いていた明治 41 年、江島茂逸は、この『博

多青年須読——荒尾精氏日清貿易談』を発刊したのです。

幕末から明治にかけて、西側諸国の植民地政策や、ロシアの南下問題は日本国民にとっては焦眉の急でした。今のウクライナに近い状況で想像を絶する心境であったのかもしれない。

その中において、荒尾精や根津一は欧米列強の前に、まず日本に一番近い中国のことが最重要問題だと論じているのです。鐘崎は入所後、一年ほど経つと荒尾精から安徽省無湖の日本雑貨商店「順安号」に勤務を依頼されました。鐘崎はすぐに快く引き受けたそうです。尊敬する荒尾精から声を掛けられ相当嬉しかったと思います。「これらへの対策は商業といえども、学校も必要だが、それ以上に実地を踏まえた実習訓練が必要だ」荒尾精のこの言葉を一生胸に刻んだ鐘崎だったでしょう。その後、福沢諭吉や渋沢栄一が唱えたといわれる「土魂商才」ですが、その前に実行に移そうとしたのは、紛れもなく荒尾精ではなかったのでしょうか。理想の為に実行する。それは陽明学に繋がるのかもしれない。

鐘崎は、広島大本営で明治天皇に拝謁するという破格な名誉を受けました。理由は、天津にて李鴻章の野望や戦略、北京政府の情報などを逐一、参謀本部に急報したことにありました。更に、北京の周囲を廻り直隸省の様子を偵察したといえます。水を得た魚のように大陸を駆け巡り、好きな商売もしながら無我夢中で走っている鐘崎の姿が目浮かぶようです。最後は残念にも金州城で刑死となりましたが、彼は思い残すこ

となく自分のやり方で生きたのだと思います。

人の一生では、心から尊敬できる人物に会うという事は、そうあるものではありません。尊敬できる人たちに出会い、大好きな

仲間たちと共に生きた鐘崎は本当に幸せだったのではないのでしょうか。ですから母も、きっと今日の追悼祭を喜んでいることと思います。

今日は本当にありがとうございました。